



森林来世界 ～Forest is one of the necessities of life～



豊かな緑によって彩られた国。

自然を崇拜してきた国。

私たちはいつからかそれを当たり前のように思っていた。
感謝の気持ちを忘れ、常に自分たちの背景には豊かな緑があるのだと。

しかし、近代化し発達した社会によって森林は放置され、光を失いつつある。

見て見ぬふりはもうやめよう。

これからの環境を生き抜くために再び手を合わせて歩んでいくときがきたのではないか。

problem

北から南へ細長くつながる日本は、豊かな緑に恵まれた国である。その緑を信仰の対象とする受け取り方は、日本人ならではの文化となり、現代にも引き継がれてきた。

環境の世紀と呼ばれる21世紀において、森林の保護は無視できない項目であろう。機械文明の発展、外国との資源の交換などから、国産材の需要は極端に減少し、今、日本の森林は窮地に立たされている。林業の衰退、それに伴う地方都市の過疎化など、国産材の需要の低下は、様々な悪影響をもたらした。この状況が今後続くことは、洪水や土砂崩れなどの災害を増やし、さらには地球温暖化にもつながってしまう。

proposal

木に対する思いはどれも共通していることではないだろうが、人間と同じ生き物として生きてきた木ならば、その生命のぬくもりが人の肌には何か体温を伝え、木に囲まれていると、何かにのびのびとおぼえる。つまり、人々の生活が木で覆われていたならば、今以上に豊かな生活環境に築くことができるだろう。

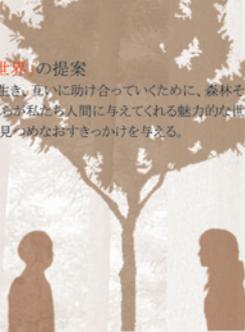
concept

back to back

「森林を大切にすること」それが、今後何百年、いや何十年先の生活環境に関わってくるということを理解しなくてはならない。そのために私たちは何ができるのか。それを、**宮川村の努力の中、共に学び実行する力をつける**。わずかもかもしれないが、その積み重ねが、これからの生活環境を整えていくための答えなのだから。

「森林来世界」の提案

森林と共に生き、互いに助け合っていくために、森林そして木材の力強さを知り、それが私たち人間に与えてくれる魅力的な世界を体感し、この先の森林像を見つめなおすきっかけを与える。



situation

三重県多気郡宮川村

三重県の中西部に位置する宮川村は大台山形の山々に囲まれた緑と清流のふるさとである。その名の通り村内を横断する宮川は、日本一の清流に認定されたこともある。また、三重県一の林業地域で、その木材はFSCに認定されるほどである。しかし、林業の衰退から過疎化が進み、林業復興を目指している。近年、林業後継者育成の目的も兼ねて、第3セクターによる林業団体「フォレストファイターズ」が結成され、その動きを強めている。そのような中、自然環境への関心が高まり始め、Uターン、Iターンなどが増加している。

計画地は横に長い宮川村の最東端に位置し、宮川への景色が急に開ける村のエントランス部分とした。



三重県中部から南へある国道の号線と、宮川村を横切る林道31号線の交点より、31号線を西へ500m程度走ったところに敷地(宮川村入り口)がある。



program

森林・木・川沿いによる3層構成

forest gallery
森林の果たす役割を理解し、生き抜いていくためにその大切さを知る。

wood gallery
そのために木を使い、それが忘れていた木のぬくもりを思い出させる。

deck park
宮川の美しさを体験し、改めて森林の力を知る。

森林を大切にしているという問題意識から入り、しだいに木の良さを感じ、後押しされるのではなく、自発的に森林保護に取り組めるようになる。

木の需要拡大の影響

環境問題や様々な災害への対応
森林として炭素を蓄える役割や優れた保水力による対応

豊かな自然環境の形成
木一本一本が私から出す善分によって宮川村をより美しいものに仕立て変える

地方都市の職業の安定
林業の安定に伴い、家具デザイナーや建築家等の職種が増加



layout

自然との融合、市民と専門家による協力、常に意識された森林の大切さ、この3項目を有機的に配置することにより、地域住民にとっても、観光客にとっても森林と向き合えるきっかけを作ることができると考えた。

site plan S=1:1000

forest garely

間伐された森林とそうでないものの違いは、木々の隙間を抜けてくる木漏れ日にある。根元への太陽光の到達量の差により森林空間は変化する。大きな空間、十分な太陽光があつてこそ、森林は十分な働きをする。森林サイクルの重要性を認識してもらう空間。

wood garely

展示・工房ゾーン
観光客を主体とした、木との触れ合い空間。地域の人々の作ったオリジナルの展示や、旅の思い出作りのための工房により宮川の木材と触れ合う機会を作る。
専門家のアフォーメーションの展示空間

学習ゾーン
専門家が、地域住民と共に、協力して森林を守っていくために実践錯誤する空間。地域住民に対して、専門化が様々な方法を提案する展示により、興味の幅を広げる。

deck park

入り組んだ外部デッキは眺望点を限定せず、宮川と、この施設の様々な景色を表現し、川と森林の密接な関係に気づく。

休憩デッキ
イベントデッキ
眺望デッキ
眺望デッキ

配置決定の経緯

山と川に囲まれた豊饒な土地に、専門家が市民に気づかせるための、研修室を配置する。

そのアプローチとして森林のギャラリ-を設置し、常に森林の大切さを知らせる。

専門家が市民の活動場所(外部デッキ)を分離し、それぞれ川に近い形態をとる。

二つの活動場所は森林保護の要する地点となった研修室でつなげる。

アプローチ自然に対する形態・外部のつながりを考慮しこの形態に至る。

401743 toru watanabe II

method

森林の保護を現実のものとするには様々な木の利用法がなくてはならない。木を日常生活にどのように当てはめたいのか、それを、森林の役割を深く理解した上で、市民一人一人が自発的に追求していくことを目指す。

forest garely

エントランス部分にあたるこのレイヤーは、美しい森林とはどのようなものなのか、またそのためにどのような苦労がされてきたのか。さらに、良い森林・悪い森林の及ぼす影響を各地の事例を参考に学び、宮川村ではどうなのか、これからどうしていけばいいのか、市民一人一人が自発的に行動できるように、問題意識と保護意識をもたせ、森林サイクルの大切さを伝えるレイヤーである。

森林サイクル

森林の減少 ← 土砂崩れや洪水 ・ 地球温暖化

wood garely

木を使うこと、それが今の市民に与えられた使命である。しかし、市民のなかで、木を使うレベルにまで達している人は少ないだろう。そこでこのレイヤーは専門家の努力のもと、研修室での講義などを通して、工作や家具づくりをはじめ、住宅設計やまちづくりまで、幅広く知識を付けてもらうためのレイヤーである。

市民が自発的に木に関する勉強を行い、それを専門家がサポートする。

彫刻や家具作りなど、観光の思い出作りや趣味として、木と触れ合う。

宮川村の生命体と触れ合うために彫刻やプランターなどの製作により身近に自然を感じることができる。

deck park

良い森林があるところに、良い川がある。周囲の森林が与えてくれた財産「宮川」を身近に感じながら、このきれいな環境を壊さないために、まちづくり規模までの木の利用について検討し、専門化が市民に投げかけ、共に手を取り合い実行するレイヤーである。

だれでも気軽にできる規定の部材による積み木ボックス、のちに木製休憩場に変化する。

道敷の縁を木造ブロック積工で仕上げることで、縁のまちとして特徴付ける。

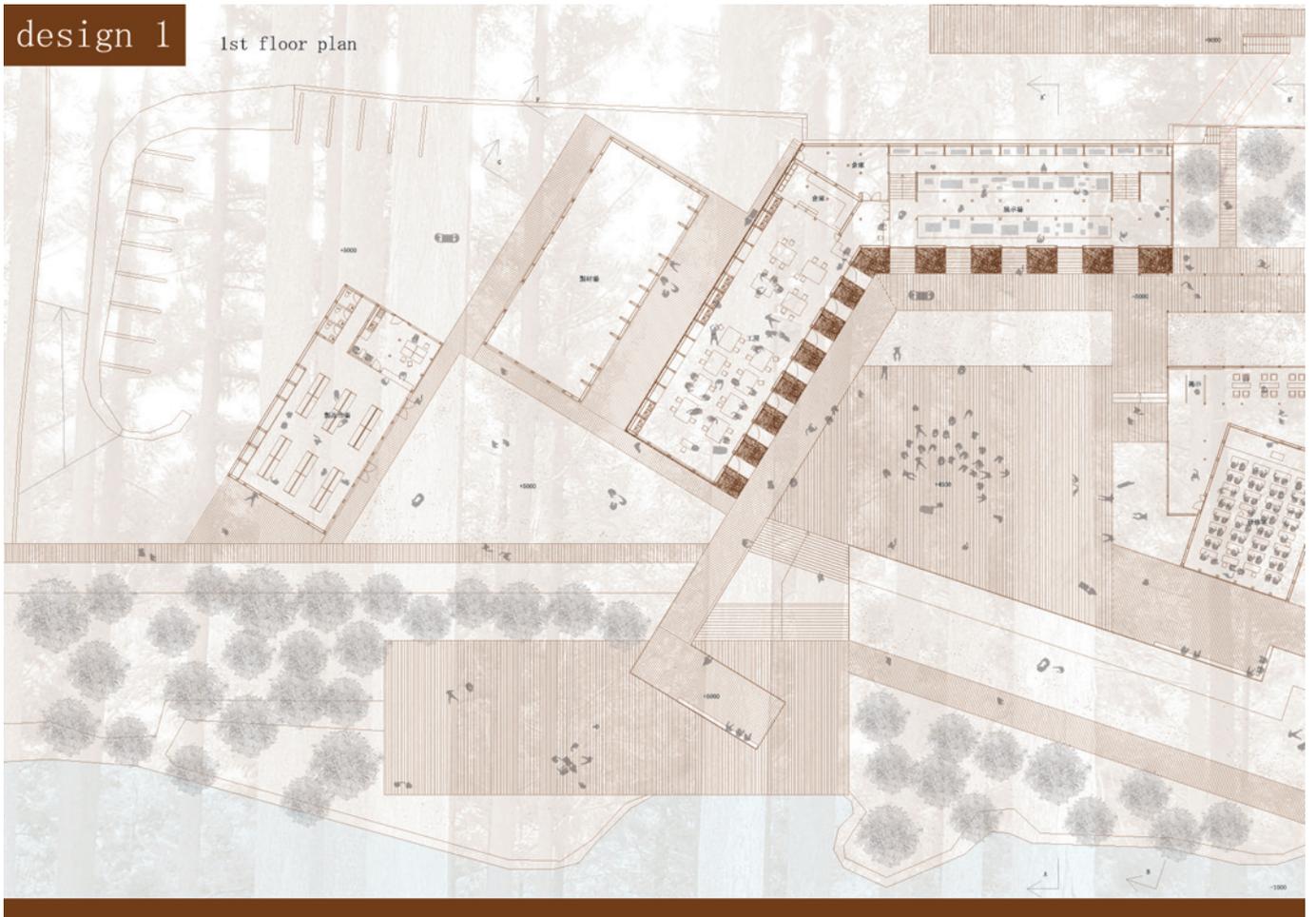
芝草を敷き詰めた木のデッキ等による、歩道仕上げ材の検討。

地域住民のオリジナルの様々な作品等の市の開催。

401743 toru watanabe III

design 1

1st floor plan



state

森林を守るために木を利用する。専門家は、市民に対して積極的の声を投げかけ、市民はそれをポジティブに受け入れることができる関係を作らなければならない。2者の協力が、森林と向き合い会話できる環境を



2700mmピッチで柱が配置されているエントランス空間

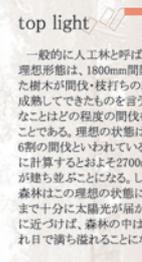
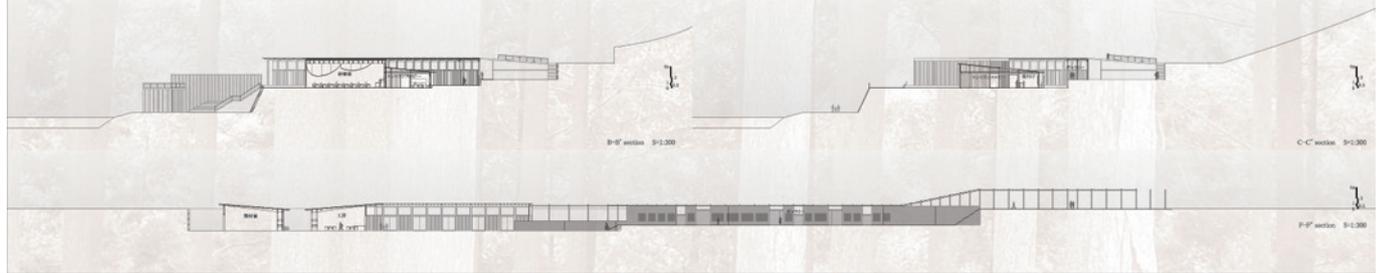


木と触れ合うデッキ空間



市民が積極的に木について学ぶ学習室

「木の良さ」それは、近年の私たちが頼り続けてきた機械文明によって、見失いがちな価値ではないだろうか。工学的な考えに信頼をおくあまり、数量的に証明できない、木のような原始的で素朴な素材の良さを忘れて



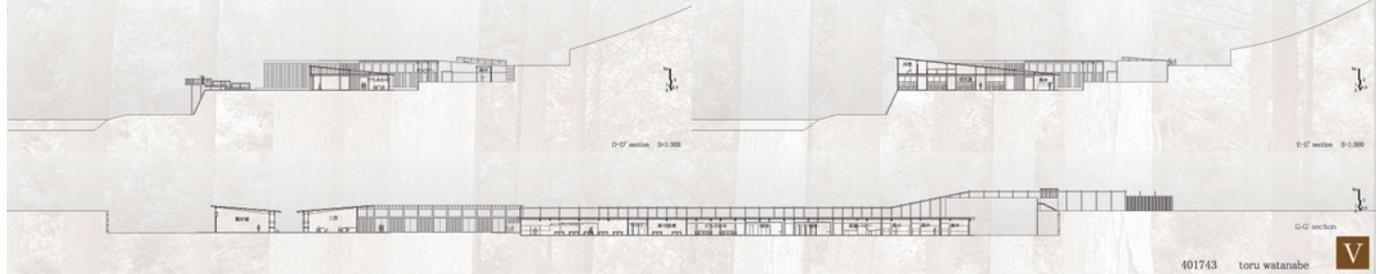
top light

一般的に人工林と呼ばれる森林の理想形態は、1800mm間隔で植林された樹木の間伐・枝打ちの段階を経て成熟してきたものを言う。そこで重要なことはどの程度の間伐を行おうかということである。理想の状態はおおよそ5~6割の間伐といわれている。つまり素直に計算するとおよそ2700mm間隔で木が建ち並ぶことになる。しかし、多くの森林はこの理想の状態に及ばず根元まで十分に太陽光が届かない。理想に近づけば、森林の中は豊かな木漏れ日で満ち溢れることになるだろう。



トップライトが柱に穿てられ一つの展示物として、この空間に与えられる。

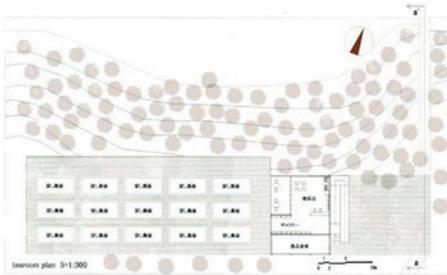
っていたのである。近代を過ごしてきた私たちに、懐かしい思い出と新しい1ページを与えてくれる、その良さを。共に生き、助け合ってきた森林と人との会話は、決して絶やしてはいけない大切なものではないだろうか。



design 2

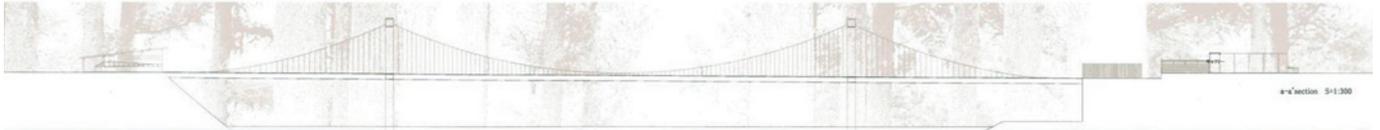
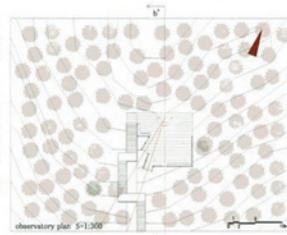
farming

対岸の敷地は、隣の大台町の土地である。大台町は、お茶の産地として県内では有名な町であり、宮川村と異なり、農業の盛んな地域でもある。そこで対岸には、貸し農園を計画し、パーベキューのための野菜等を地域の人々が施設利用と共に管理できるように、この敷地に計画した。またこの喫茶店からの風景は、建築の主な眺望点であり、背景の壮大な山のふもとに、一目で暖かみの伝わる風景が展開されるだろう。



observatory

山の上に設けられたこの展望台は、無意識に2つの空間を把握できるものとなっている。いま、展望台を原点に3つの軸線が引かれている。それは、森林の中(展望台)に来たときにその軸線によって囲まれている風景(活動)を、宮川を背景に観察してもらうためである。それを現在の森林と照らし合わせるために、自分はどうするべきなのか、何が出来るのか、と感じてもらうために計画した。



401743 toru watanabe

VI

